

王

源氏物語七海

紫雲之玉源氏物語

全







紫家七論

系圖附

藤原為章撰



閑院左大臣久嗣公第六子

良門

內舍人正六位上  
贈太政大臣正一位

利基

從四位上右中將

兼輔

從三位  
從三位 號堤中納言  
歌人

雅正

從五位下刑部少輔  
雅作雅誤

為賴

從四位下太皇太后宮亮  
母右大臣定方女  
歌人

伊祐

從四位下讚岐守

賴成

從四位下因幡守  
實具平親王男

今按紫日記云...  
今按紫日記云...  
今按紫日記云...  
今按紫日記云...  
今按紫日記云...  
今按紫日記云...  
今按紫日記云...  
今按紫日記云...  
今按紫日記云...  
今按紫日記云...

為時

正四位下越後守或作越前守  
儒者歌人

惟規

從五位下式部丞  
母常陸介為信女

紫日記云...  
紫日記云...  
紫日記云...  
紫日記云...  
紫日記云...  
紫日記云...  
紫日記云...  
紫日記云...  
紫日記云...  
紫日記云...

惟通

從五位下安藝守

定暹

阿闍黎

女子

紫式部

母同惟親

嫁左左衛門權佐宣孝

今按宣孝卒後仕上東門院

河海按之鷹司殿從二位倫子官女也相繼而陪仕上東門院  
 又云源氏一部の中、紫のといふ事とともれ、去出ら  
 らるゝ友式部の名と何れかたけい紫式部と号するは、  
 今按紫日記云た紫部公任あけいけいりり、若は公や  
 さうゆ、いふは、いふ式部と稱して若は公と稱  
 せられ、河海按のけ説む、あけいり、又按宣孝系圖、  
 長保三四二十年とりの紫日記と合考、長保三年  
 四月二十五日、宣孝卒しては、乙未年、いり、あけ  
 といふて宣孝、いふは、あけいり、いり  
 といふ、河海按、いり、いり、あけいり、いり、いり、  
 いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

たもと七論の中、いふ、いり、いり、  
 系圖異本、道長公、  
 妾也後嫁宣孝といふ、傳説の誤なり

父宣孝

女子

賢子 嫁太宰大貳高階成章因、子太貳三位

後一條院御乳母

系圖河海及上記、いふ、乙未、いり、いり、大貳三位、云

父同上  
女子

弁局 後冷泉院御乳母

系圖河海楚之乃友、長保三年八月、二月、冷泉

院沙遊をりりりり乳母といふ事よ云々大文の内乃  
乃紫式部といふ事乃越後弁を御侍の也子といふ事  
をついでまつりけり云々

大文と上東門院たりたつて御侍の兼隆の事なり  
け書極とありは紫式部も百廿二年の比に於  
てなとて大文よはりといふ也

又後上院を長之四年九月廿日と東門院位を  
りして供奉の事云一の車よは元四年弁令婦た進  
令ぬ少將の元志二入車よは侍従のといけ越後の  
弁乃りれと大輔平少将元俊の少弁無休内侍所  
車れよりいふ事有之位をさつていひらる宣方ハ源

大納言乃いしといふ位の内沙遊の事大貳の二  
位なり

け侍より大貳之位弁の乳母といふ事母の式  
部といふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

やいといふ事長元四年の事いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

さ東の杯といふ事後菅光園院  
攝政良基公作は紫式部が源氏白氏う文  
集身よといふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

らいけい

け後京極友の沙河流抄よといふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事



とらうて事實と共るよやうといふは似る  
人ともくは酒兼備乃賢婦なりまづ物  
治乃とてひつふらといふは治乃とれら  
くといふおんこつらあめいあつらうか  
て用えちるゆゑ乃とれらたうといふの  
ゆりうりたらし里ののゆきみとる夜  
並乃后れらやしらとくわいこい  
しはらあまの院れかへ名と情み  
たよらむらうとこのゆきみこいせ思  
のいこら総角乃とめ又まは思裁とよま

とらうていへく乃婦はとらうて  
よあまのいふまゝとらうて思  
しりまゝに改裁とらうていふ  
し武部といふとらうていふ  
し物治とまなとらうて賢い  
とらうていふとらうていふ地  
乃やいふ人あまのいふとま  
人仕治  
い偃師がらうていふとらうて  
まの日記とらうて其大抵  
い







早トシラチカニシテ一昔の昔から一昔の昔まで

活カシメテ一昔の昔から一昔の昔まで

上野門宛

文ノ書カセヨ

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

と葉成部物カシラシメテ一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

と接い候と一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

又云たしだよ一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで

一昔の昔から一昔の昔まで



ふ... 又道長が長保三年  
の年... 武部... 上東門院の御母... 武部...  
... 道長... 武部...  
...

日記寛弘元年... 武部...  
... 武部...  
...

... 武部...  
... 武部...  
...

今按武部...  
...  
...

白鳥の...  
又...

...

...

又之...  
同年十月廿三日...  
又之...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or name, including the word "Handwritten" written vertically.

今接し迷情なるを或は...  
を授けんとせしむるは...  
は...なるを...

わがし

又之<sup>實証云</sup>源氏物語<sup>上巻</sup>にありと云ふ...  
して例の...  
梅入<sup>之</sup>...

又之<sup>實証云</sup>源氏物語<sup>上巻</sup>にありと云ふ...  
は...なるを...  
は...なるを...

或は...  
は...なるを...

又之<sup>實証云</sup>源氏物語<sup>上巻</sup>にありと云ふ...  
は...なるを...  
は...なるを...

くらゝもまじりしる ぬ

<sup>或部</sup>なま〜い〜りま〜く〜れゆ〜んまで

〜い〜や〜か〜ま  
けはす言の物撰  
はまの秘

今梅道長との延想と年月令ら〜んか〜つ  
せら〜いていふも世家のほろ〜んとあ〜つ  
い物家なるい〜か〜り〜日記と〜り〜考  
と〜い〜わ〜れ〜い〜日記と〜り〜考  
とら〜んれ〜い〜てら〜んとの彙〜り〜ら〜ん  
て〜い〜事〜を〜り〜物〜い〜さ〜か〜せ〜中〜なる慶應  
と〜い〜て〜学〜ぶ〜た〜先〜達〜の〜稱〜え〜何〜ぞ〜り〜あ〜ん

〜い〜物語乃としてゆは〜て日記の趣よ  
及〜ん今〜れ大拙とわ〜るふ

日記云〜ら〜りや或説に皇太子は同書にていふ〜ら〜り曹

同〜ら〜り乃琴和琴志〜ら〜り〜ら〜り

ぬのらら日あるた倒せを〜ら〜り

ま〜ら〜り塵積〜ら〜り倚立〜ら〜り厨子

ち〜ら〜り同のまゆよ〜ら〜り入法提燈もむ

たりみ右きよきを〜りお大月厨子ちら〜り

よ〜ら〜り積つ〜り〜物い〜ら〜り虫〜ら〜り鼻ちら〜り

〜ら〜り鼻〜ら〜り〜ら〜り〜ら〜り





所をこれにえさくし出づらんよに或は記述惟親とらば  
人姑りつとして史記とらばゆゑよみゆり時す  
あつひの惟親の人とてさくまのりりりりりりりり  
とも河や式しれまてぶさくゆりりりりりりりりり  
ふいせきりちや為持ひひひひひひひひひひひひひひ  
ぬいそ幸ふしひひひひひひひひひひひひひひひひひ  
と梅きくも男の子きくもきくもうび古今あび

又云又乃上東院おすよとして文集の可くよをせし  
なましきくさゆらりりりりりりりりりりりりりりりり

きよおぬいりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
くぬいりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
樂府とらばあみりりりりりりりりりりりりりりりりり  
きくもゆりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

今梅け日記乃題をて或部う字忘れ厨子  
とらばこれ同ニ題ゆりりりりりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

きことハ知れりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
とらば佛家の流疏法家日記乾中寺部王月  
記と妻し  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
和歌の集古集下  
家集下古く物語くらや下

爰に詠曲あはせき法に半裁いづれ法を以て  
乃通し一編をたし日記并に物語の  
評をてしとせしむ。一推親よりしりや  
きよきことし作しと評しよ皇女の時  
より聰惠つと法記ありて天竺乃女宮なるの  
大なるる厨子こしなりし法もよき撰えらむ  
何よてし作しりんいよとせしむし  
を徒も女もいらりしを賢婦人けんたりし  
物語ありし容易し者ことしとす

其二 七事共具

父の時ら爰に品文時乃すよして名は學其  
まゝ款ともよみし集めも撰えらむしり  
と父とてせし 其二 兄推親と後拾遺よ  
りゆく末乃集ありし款人なりし  
が物ありしをよみしりりつとす  
所とも或詠ありしとせしむし  
んれを聰明とつし神童ありし  
たさよよるしとせしむし女むすめの  
しりしなるし彼かの意なりしとせしむし

おつゝいお漢の積書とよむる楽以下  
 の業よとていたるゝなりとよむる積集云  
 上東の流の傍にきくと里のわづらわらぬ  
 せいとてはつてお華はいつておんいひては  
 たりたつらうとておんいひておんいひては  
 の事とおぬらきとてやんたぬ人は華は侍授  
 してこそお楽とてゝおんいひておんいひては  
 院中 中文 東文 院王 攝政 ぬらぬらとよむる  
 何とていへば元月 節会よりとてゝおんいひては  
 まゝ恒例 修時一とておんいひておんいひては  
 合

其三  
 林表

誇めくても人批鞠をく得たからまゆか  
 ことよむるおんいひておんいひておんいひては  
 文質のくおんいひておんいひておんいひては  
 何とていへば元月 節会よりとてゝおんいひては  
 小野 河内 河内 河内 河内 河内 河内 河内  
 此奥くは海の音比 殿の心 橋は 嶺ありて  
 けすり有まゝとておんいひておんいひておんいひては  
 みゆは 是 皆 也 氣 け たり け たり け たり け たり  
 して け たり け たり け たり け たり け たり け たり

あしは作らるる

續東京集小巻のりしりたるとゆふ  
さしのあいにうらやもたふりてま

しき道多しう成るて漢はけり  
ちありしせふありなるうたよめや  
塩はし道に海井部

むろくしれきふ常陸の事とちる  
る信或母とよめしりたふりて  
其の第一部

のさし道にあいにうらやもたふりて  
女をれむたのりてあにうらやもたふりて

たり女もしりてあにうらやもたふりて  
のさし道にあいにうらやもたふりて

及んち或部もあにうらやもたふりて  
しりてあにうらやもたふりて

其の七部  
Dome (part 7)

或部もあにうらやもたふりて

そのし物語いてしりてあにうらやもたふりて

しりてあにうらやもたふりて

とよめしりてあにうらやもたふりて

しりてあにうらやもたふりて

りれい昔なふけ物語りしりてあにうらやもたふりて

しりてあにうらやもたふりて

其の三 終撰の年序

日記 寛弘五年 在任郷 菅原の文 云々

あしひらねやふらねうらふら源氏小  
あゆい今もそほねふのうらまはしういそ  
まのーたほりんとあやめいり

今按け文をひくそれは物語はこころいふあ  
小出とくちやくふ中へ流布しておとこがま  
ふむせしめしこと或説とて差業と称す也

又同六年 一五院 之内のこの源氏の物語人よふ海をたひ  
はしめしめしけりふい

今按これとほ事と追記しつれをいふ  
かりき記いつこの年と定めし

又同年云源氏の物語 上東門院 おすしよわろを 道長云 殿の心流せ

今按河海抄よ寛弘の始小出いそとがし  
流るるはねの又小ゆりてよやいしあも  
長保の末寛弘のころ武治やりあすむえ  
里小ゆりけるつとく小ゆりる寛弘又年  
小道長と四十三歳とて或説小説云のたひ  
同六年小波友の戸とよきまびけひりま  
かといひく老姫よのこす又うらまはし  
さつらよしとくねをいしあらる女も  
るす寸葉花物語 后上院 よ申又威子二十



おて慧日記とていつてきつたなり日記は赤坂  
高の清が御之いつて此部母院中なるもの  
とよきとていつてきつたなり日記は赤坂  
とていつてきつたなり日記は赤坂  
日記とていつてきつたなり日記は赤坂  
とていつてきつたなり日記は赤坂  
乃きハ堀河は清世の事とていつてきつたなり  
深とていつてきつたなり日記は赤坂  
とていつてきつたなり日記は赤坂  
深とていつてきつたなり日記は赤坂  
とていつてきつたなり日記は赤坂

とていつてきつたなり日記は赤坂  
傳とていつてきつたなり日記は赤坂  
とていつてきつたなり日記は赤坂  
とていつてきつたなり日記は赤坂

其四 文章無雙

物語乃らわ秋るべし河のふり葉古今  
仔細とていつてきつたなり日記は赤坂  
とていつてきつたなり日記は赤坂



やけくおるも吉玉乃風流とほく  
くねむる人として倦事とく  
しほくもやうくさるるも  
なり全篇の富貴温潤の氣象よりて官  
様の文章なれども中より山林出世あり  
市井田家あり貧困哀傷あり園情風  
系ハ其こもふく情とくつ一系を  
かざる事よの河より其人よこひを  
よめくもく一全體をほく又よ  
つし序の辭あり跋あり記あり論あり

書ありく流弊をれをさるるかのみよあれ  
まの忠定ハ好よ奇めなる物あり其章  
其章後とりたるはけり時よ序して云  
論破あり論義あり論反あり論尾あり  
より細より俗より雅よともし繁より簡  
よ端よ波瀾頓挫照應伏案をどりよとく  
し其文法よのつしよかたりこれ氣脈ハ悠  
揚よ寛裕よその文勢ハ圓活して婉  
曲なりこれ忠定のこころん一語これと漢文よて足る  
史記在る韓柳歐蘇よ記しよ一女子

まよひしつらふもあやしく武節を成す今  
獨歩のすまらふにあり清業とらひ  
ありしつらふに法を細くす氣挟ふ  
さしならむに法ありてまよひしつらふ  
とのなり同日も海にぞくは岸の路或人の  
武節が又さうとて何とて世實徳とく  
て吾用乃修り世とありてせむに誨  
法は味とありし事いふと余をいふ事  
や言ふにいふにあらむ時が言ふ  
ぬ笑ありし言ふにあらむ一説の固史を撰

いふ百代の浪浪より修りてまよひ  
も英才つらふにありし事とく  
よ修りしつらふにありし事とく  
と教へしつらふにありし事とく  
も修りしつらふにありし事とく  
ら修りしつらふにありし事とく  
いふ修りしつらふにありし事とく  
たも修りしつらふにありし事とく  
まよひしつらふにありし事とく  
が修りしつらふにありし事とく  
但しつらふにありし事とく

實錄とよめるは日記すからる實錄あり  
ゆゑに實錄物語はむとまじりて今に  
おらひつゝ日記しつゝ一室ありて數十年の  
まじりつゝ日記しつゝ一室ありて數十年の  
りつゝ一室ありて數十年の  
其書とよめる人らとよめる風儀用とよめる  
つゝ一室ありて數十年の  
なまじりつゝ一室ありて數十年の  
詩と載せしむるはさうとよめる  
刺勸戒の詩歌の体ありて一室ありて數十年の

丁寧なりつゝ一室ありて數十年の  
ハ勸戒なりつゝ一室ありて數十年の  
なまじりつゝ一室ありて數十年の  
なき儒佛ありて一室ありて數十年の  
風儀とよめる美刺とよめる一室ありて數十年の  
感味ありつゝ一室ありて數十年の  
まじりつゝ一室ありて數十年の  
なりつゝ一室ありて數十年の  
人ら誦讀ありつゝ一室ありて數十年の  
人ら誦讀ありつゝ一室ありて數十年の

これぞけ物流と歎道乃經典一備一傳  
ま—さの傳—ぬ—し—を或人うかづ—  
右國い<sup>巖</sup>やひ<sup>崇</sup>—り—れ人れじまはれ  
を直諫—入—し—し—の物や—り—る  
混論をん痛—よ—る—業—て—き—も—歎—  
乃—卒—之—の—傳—り—ん—る—

其五 作者本意

け物流り—り—人情世態—と述—く—み—中—を

乃風儀月—と—と—事—と好—文—を  
貞<sup>貞</sup>刺<sup>刺</sup>と河—わ—い—ん—る—人—と—  
り—と定—し—大旨—の—婦—人—を—  
い—し—の—お—の—い—の—ら—い—  
お—り—部—ら—し—と—奉—て—例—は—相—主—帝  
乃—と—お—ん—て—文—を—流—遇—す—い—れ  
い—ん—と—い—い—と—い—い—と—  
た—り—い—い—い—い—い—い—い—い—  
い—い—い—い—い—い—い—い—  
な—り—い—い—い—い—い—い—い—い—



物ら〜  
横ら〜  
人〜  
だ〜  
と〜  
ま〜  
か〜  
近〜  
〜  
跡情思の〜

世乃いま〜  
〜  
源氏の犯〜  
〜  
公家の涉鑑〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

かたしあはれなる事なりん所(一) 一、 二、 三、 四、 五、 六、 七、 八、 九、 十、 十一、 十二、 十三、 十四、 十五、 十六、 十七、 十八、 十九、 二十、 二十一、 二十二、 二十三、 二十四、 二十五、 二十六、 二十七、 二十八、 二十九、 三十、 三十一、 三十二、 三十三、 三十四、 三十五、 三十六、 三十七、 三十八、 三十九、 四十、 四十一、 四十二、 四十三、 四十四、 四十五、 四十六、 四十七、 四十八、 四十九、 五十、 五十一、 五十二、 五十三、 五十四、 五十五、 五十六、 五十七、 五十八、 五十九、 六十、 六十一、 六十二、 六十三、 六十四、 六十五、 六十六、 六十七、 六十八、 六十九、 七十、 七十一、 七十二、 七十三、 七十四、 七十五、 七十六、 七十七、 七十八、 七十九、 八十、 八十一、 八十二、 八十三、 八十四、 八十五、 八十六、 八十七、 八十八、 八十九、 九十、 九十一、 九十二、 九十三、 九十四、 九十五、 九十六、 九十七、 九十八、 九十九、 百、

一、 二、 三、 四、 五、 六、 七、 八、 九、 十、 十一、 十二、 十三、 十四、 十五、 十六、 十七、 十八、 十九、 二十、 二十一、 二十二、 二十三、 二十四、 二十五、 二十六、 二十七、 二十八、 二十九、 三十、 三十一、 三十二、 三十三、 三十四、 三十五、 三十六、 三十七、 三十八、 三十九、 四十、 四十一、 四十二、 四十三、 四十四、 四十五、 四十六、 四十七、 四十八、 四十九、 五十、 五十一、 五十二、 五十三、 五十四、 五十五、 五十六、 五十七、 五十八、 五十九、 六十、 六十一、 六十二、 六十三、 六十四、 六十五、 六十六、 六十七、 六十八、 六十九、 七十、 七十一、 七十二、 七十三、 七十四、 七十五、 七十六、 七十七、 七十八、 七十九、 八十、 八十一、 八十二、 八十三、 八十四、 八十五、 八十六、 八十七、 八十八、 八十九、 九十、 九十一、 九十二、 九十三、 九十四、 九十五、 九十六、 九十七、 九十八、 九十九、 百、

其六 一部大事

冷泉院乃法事とありしを修り物事をいふ  
少治と事ありしを修り物事をいふ  
ちりしを修り物事をいふ  
んありしを修り物事をいふ  
しを修り物事をいふ

〜〜〜〜〜 爲章 減今

按〜〜〜 識者乃〜 此〜 考〜 考〜

相臺卷三源氏の書ハ〜 記〜 考〜 考〜

の源氏〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

是より北条の信長家奉〜 俟は実小源氏

源氏〜 考〜 考〜 考〜 考〜

ありを信〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

善業下巻下篇本篇の書ハ〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

〜 考〜 考〜 考〜 考〜

源ん 考 考 考 考



Handwritten musical notation on the right page, consisting of a single melodic line with various note values and rests.

Handwritten musical notation on the left page, consisting of a single melodic line with various note values and rests.

Handwritten text on the left page, including the characters "後撰集" (Goshū Wakashū) and "後撰集の系" (Goshū Wakashū no Kei).

物所よ花山女實資ふふ 藤原友女仲水を復

帝實資ふふ 藤原友女仲水を復

ら〜〜水の移さ〜ふあひさなあ〜

〜〜おの幸あ〜物のも〜れ日の幸ふ

〜〜〜〜〜皇胤治一代よ〜もあふ

友女友女た〜〜〜〜〜容あ〜ゆあ〜

〜〜〜〜東海と〜魯仲連のぬ

〜〜〜〜友女よ源氏のあ〜冷泉院と

〜〜〜〜油〜有〜あ〜

源氏の源氏乃眾あ〜〜〜皇胤のあ〜

〜〜〜〜相室帝れあ〜

よ〜〜〜源あり源氏天皇の血脈

あり伊弉乃宗廟との記と〜を治ひ天下の

蒼生これ政と〜〜〜

冷泉院乃神辰と〜〜朱薙れ平流よ〜

〜〜〜〜〜あ〜

一旦人論乃〜〜長〜皇統の〜

〜〜〜〜〜あ〜

〜〜〜〜〜あ〜

乃飛とくしんしんとして皇胤のおまゐり  
しなむるをいふは一は部一は部が  
をえしとてしんしんとして皇胤のおまゐり  
式部が南討すも一は部一は部は治よらぬ  
もして去る一は部は遠言汎流とて治よらぬ  
ふちとてたすもいふとあしとあしとせ  
治よらぬ一は部とて治よらぬ一は部は治よらぬ  
一は部一は部の二條店をいふは部一は部は治よらぬ  
るしとてしんしんとして皇胤のおまゐり  
式部がよそとて私通ははとて治よらぬ

まじしんしんとして皇胤のおまゐり  
とてしんしんとして皇胤のおまゐり  
始は實よは部一は部は治よらぬ  
とてしんしんとして皇胤のおまゐり  
見よ胡致堂といふと治よらぬ  
家者難買妾必擇其良羌胡無禮義廉恥  
尚且温腸正世惡族類之龐也而况諸侯手何  
羸楚悅色納姬不疑其故遂使大買生敗心焉  
自是有天下者蓋呂姓也柏翳宗廟至是而

絶云云鶴林生露より羅大經と云く論して云、  
秦虎視山東蠶食六國不知六國未滅而秦  
先滅矣何也始皇乃呂不韋之子則是嬴  
氏為呂氏所滅也司馬氏欺人孤寡而奪之位  
不知魏滅未幾而晉亦滅矣何也元帝乃牛金  
之子則是司馬氏為牛氏所滅也云云これ他の  
玉乃事よてくあらまゝに次や朝廷に  
宮中乃こつをよせ給ひてりよのこり世  
一系こゝよゆざれに世給事ありてよやよ  
よ急の世もめ治文夜のうらよらを給。

いふらまゝに帝系のみまゝに  
いてさぬ一やとよおひにらり一風  
論と見れを式詔の女をれもろれ生質  
乃美と字向のちとらあひて識見  
よのつゝ大儒れ云に一  
よし意大ぬの事ハ天道好還の理を  
りよらあひしに罪をゆるす事あり  
け一件ハつ詔乃大事なり一海を人のさ  
けりよらに事あり 或人れに  
しよらあひてきたる物ありて

是は、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

壹、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

乃其言... 幸乞... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...

乃經書... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...

其七 正傳説誤

宇治大綱物語云、越前守為時活氏の...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...  
 ... 乃... 乃... 乃...

いづれか後ともせん

吾名物云大府院村上女十文  
選子商親王より上東に流るる

なまはたけの物産やまのふりてはくちの  
せまひけりよ業武部とりてはくちの  
とくちの作の合をけりてはくちの  
何の物産よあらはれりてはくちの  
しるしはくちの物産はくちの  
なまはたけの物産はくちの  
りたくはくちの物産はくちの  
さて里よ物産はくちの物産はくちの

しるしはくちの物産はくちの  
名についたはくちの物産はくちの  
今按け物産はくちの物産はくちの  
なまはたけの物産はくちの物産はくちの  
くちの物産はくちの物産はくちの  
あはれはくちの物産はくちの  
の物産はくちの物産はくちの  
くちの物産はくちの物産はくちの  
まはたけの物産はくちの物産はくちの  
しるしはくちの物産はくちの

ト信ありし一書は其意を尋らば抑  
こゝにおひとも事おぼしめて扱  
て婦人此語向ふく河乃つて一人の手  
あてていささかおぼしかりなり一部は  
くまゝ一書しし人ら流しては流し  
まのりし一書は前より一書は  
為備の七事共具しと書しよつ力  
とがしよつ力おぼしめしよつ力  
まゝ是又長保寛弘のゆゑなりと  
卒しよつ力しよつ力しよつ力

より又うかたしよつ力しよつ力しよつ力  
まゝと書しよつ力しよつ力しよつ力  
おぼしめしよつ力しよつ力しよつ力  
くまゝと書しよつ力しよつ力しよつ力  
乃事八年譜と書しよつ力しよつ力しよつ力  
しよつ力

一條院

長保元年十一月 道長公長女彰子入内居藤堂

十二歳 これ上東門院あり

二年三月 彰子立后 十二歳



三年四月二十五日

紫式部より丈夫侍の権儀宣孝卒

四年 五年

寛弘元年

長保六年也

二年 三年

今梅式部より中宮より系りそのののりはけ三年  
ののりたよりして下より日記の文と思は

四年 中宮 彰子 二十歳 け其或部より文集乃樂府

と云ふたまふ其文前より

五年 中宮 二十歳 九月十日 御産

後一條院御誕生也

紫日記より七月迄云々中宮のおまもり中宮し  
しゆへくはるる物成すもをすしり  
けいたまふもいとおまもりしり

もまへりておまもりしりゆへりし後をよ  
りしちりししりしゆせのたをいあ  
かろおまもりしりしゆせのたをいあ  
しりしちりししりしゆせのたをいあ  
けいたまふもいとおまもりしり

今梅は又と味より宣孝卒して或部  
かろおまもりしりしゆせのたをいあ  
大いしりしりしゆせのたをいあ  
乃とめいしりしゆせのたをいあ  
下れはゆへりしりし文とせい



とくはとくはとくはとくはとくはとくはとくは  
 院より学問の道に専らし人時中文  
 或部とてし何れもよきことあり  
 信と公とをいふ新集の式やう  
 らしむるもつれは物は何れも  
 ことらたしむるもつれは物は何れも  
 信と公とをいふ新集の式やう  
 らしむるもつれは物は何れも

海一や一とて又言ふことあり  
 たりや或部は漢書なりは氣象を  
 知れぬ人地志傳ありは又為時ハ  
 とくはとくはとくはとくはとくはとくはとくは  
 子の時なりはとくは物何れもよきことあり  
 河海抄云西文なるは二年大宰権作と丸  
 遷せしは信と公とをいふ新集の式やう  
 まりおのひありはとくは物何れもよきことあり





但一活氏乃同り心付く或詔書縁と古  
文のちやうれ机硯とと没けしとてし  
乃世何人の好事とや

又之其後法也よとくくくく十回帳よ  
よりと控大細さ成る清とて  
亦流くまゝとれけしは威字入る同白奥と  
とやれいしけ物世よみふ或詔書  
のちとる志は直事と仰る可なり

今按西徹法師もとい況とて  
部々よの事とて友氏乃也者御書同

白友事と仰るひは細流抄よハ  
い奥書の事と仰るひはこれ  
こといれり事ありしはなり  
あつたれ事とてとく一向の事  
しとてしとのありしはこれ  
つとてい奥とてしとて又  
且道長と奥書に法念くとい  
とていし人の事ありしは老  
河とて又實に二年よ及長と  
威寺よこといしは法院より上

東門地(武部)先年修(至)ら原氏一部  
河原を河(と)して入道及今(の)記(す)は  
河(部)一(の)所(と)してか(ら)る(と)い(ふ)も(と)我  
慢(乃)真(と)ま(ら)ず(に)世(奥)ま(と)い(ふ)  
乃(い)は(る)或(記)す(と)お(し)く(自)傳(の)  
事(ハ)入(り)交(れ)流(る)ま(と)い(ふ)書(は)り  
なり(き)ら(り)く(は)物(流)の(奇)妙(あり)と(記)す  
た(が)ぬ(も)よ(う)は(ら)り(と)い(ふ)

細流抄云凡日本乃國史ハ三代實錄元孝天皇  
仁和二年八月まで御事と記して其後の事ハ

け物流と記し醍醐天皇よりさる(に)心(ハ)上の  
日本記よ(と)す(一)つ(ん)と(なり)む(廣)也(の)所(お  
な)り(と)す(云)

今梅作(り)物流(も)似(わ)らぬ(事)く(一)記(え  
や)し(た)り(是)ハ(榮)花(物)流(を)し(の)洋(も)や(叶)ひ  
ゆ(ん)け(料)考(用)ひ(ご)し(一)

又云他若(乃)如(之)人(と)く(仁)義(又)帝(の)乃(は)  
川(い)は(流)よ(ハ)中(道)実(乃)性(理)と(悟)ら(り  
り)く(出)世(の)苦(根)と(成)就(と)く(こ)と(あり  
今(梅)作(れ)又(と)く(一)と(抄)り(り)の(外

ちりちり抄物と云ふ或は莊子の萬物と云ふ  
りりといひあるは史記の傳と云ふりりといひ  
又名家と云ふより人々天皇乃古事卷一  
ふと云ふ四諦乃法門と云ふいふやうに  
儒佛の教と云ふの事いふは  
或はつわものありぬる理よおのりむ  
又十位乃事りて中よのつゝ儒佛の  
乃理もの事いふ漢教の事と思ひ  
よをなる事もおほりし事其本は儒佛  
乃道と云ふ事いふもあはるる事なり

ゆんこおもひぬをさるるをゆゑ海と云  
くたん

寶物集に妄語戒と云て云まらるゝは案或部が  
座をといふ源氏物語とゆりたる事より  
地獄と云らる苦患とのびる記ゆよと云源  
氏物語と改りて一日經と云ふ事あり  
ゆゑと云はる事いふ事ありて歎ふ事  
より合て一日經と云ふ事ありてハ  
ゆんこといふ事

今按これら爰申乃事ある事いふ事あり



之筆の費たしし。新勅撰集新教部と  
る。其の式部。其の造縁経体部。其の  
ける。其の式部。其の造縁経体部。其の  
家。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
りし。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
う。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
文。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
形。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
實。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
教。其の造縁経体部。其の造縁経体部。

形。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
文。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
形。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
實。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
教。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
三。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
大。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
後。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
作。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
と。其の造縁経体部。其の造縁経体部。  
考。其の造縁経体部。其の造縁経体部。

ろもく 乃章 じい竹園 伏見殿園實照 院貞致親王 一 侍り

時この物語をこの 中務大輔冬仲 物語

乃海歌とき 先考 内匠頭定 乃国書と

法共中院通村云 乃の海歌なり 又宗胤法橋 馬丸資慶 師の御書 の海歌

は 中院 西相通茂郷地 流と を流り

水原河海花鳥浪江 をど の流抄 よら と

は く 侍りぬ を 侍ら あつ ぶ 水 候 権中調言 先国郷

此 彰考 録 侍り ぬ 事 部 三 記 御 教 日記 石 記

拾 記 丸 経 記 古 記 玉 葉 記 月 記 下

ち に せ れ 二 水 記 た 百 部 あり

乃齋記とよ く 故実 な 柱 こ ち を 書 と

ち ら け ゆ り い れ と 紫 家 の 本 文 い な と 一 か

し の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ

こ の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ

よ の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ

に た ち の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ

し て 櫃 の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ

ち や 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ

わ ら 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ

し の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ ま ち の 侍 り ぬ

為秩之符命  
振之友と之  
たて先達乃遊と今  
ふいふとあ

Handwritten signature or name in cursive script.

河上元禄十六年  
乃萬辰

安藤右平為章

業のしるしを尋ねたりとて  
と号して其行のしるしを  
都九のしるしを申しより  
こゝろ海とていふ事あり  
しゆりていふ事あり  
或はとていふ事あり  
先づいふ事あり  
常のしるしを尋ねたりとて

新中油の臭い入るる事あり  
しるしを尋ねたりとて  
或はとていふ事あり  
先づいふ事あり  
常のしるしを尋ねたりとて

此乃名よあふくく年さふいぬり  
清去の事と條しんまはふふふ  
くそ武陽大塚の事らふんふふふ  
あふふふふふふふふふふふ  
あふふふ

青竹居体資鑑

あふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふ

紫家七論一帖水戸相公家安藤新外為章  
所撰奇評確論可謂物語指南也  
無飽寫以藏之

尚友軒枝月

年山先生安友氏ひらく偽伝の書とよみあすぬ  
く本館に日記詠書とありて何となくおもしろ  
傳氏も活の十篇と云ふ一或部、女徳とあり  
一也流と詠はれ經典と稱せしむらんけふ  
と備南此篇の——古今末夜乃評をく  
ふれおもしろお母の眼目せありては第此上  
るに又とありてまうと世論をりては  
その備席とありて——しらのいれり  
校合ははつておもしろいとの詠と和——  
ゆら

Handwritten characters at the top of the right page.

Handwritten characters at the top of the left page.

Vertical handwritten text on the right page, consisting of two columns of cursive characters.

Vertical handwritten text on the right page, positioned to the right of the main text columns.





